

唯識の学系に関するチベット撰述文献

袴 谷 憲 昭

はじめに

E. Obermiller がインドの唯識学派に関して「聖典追従唯識派 (luñ gi rjes ḥbrañs sems tsam pa=āgama-anusāriṇo vijñānavādinah)」と「論理追従唯識派 (rigs paḥi rjes ḥbrañs sems tsam pa=nyāya-anusāriṇo vijñānavādinah)」との二学系があるとするチベットの伝承を紹介したことはよく知られている。¹⁾ しかし、遺憾ながらこの伝承を直接チベット文献に当て確認し直すという手続きが永いこと放置されていたように思われる。²⁾ もっとも、かような状況をもたらした責任の一端は、相当チベット語を脚註に示すのみでその典拠を明示しなかった Obermiller 自身にあるかもしれないが、後学の怠慢にあることに変わりはない。本稿がそのような状況の欠除を補う捨石になれば幸いである。

本稿で採り上げるチベット撰述文献とは、インドにおける仏教の「宗義 (grub mthaḥ)」³⁾ を中心的に扱った、ḥJam dbyañ bshad paḥi rdo rje Ṅag dbaḥ brtson ḥgrus (1648—1722) の *Grub mthaḥi rnam bsad*⁴⁾ (略号, JGN) と、これを受けた lCañ skya Rol paḥi rdo rje (1717—1786) の *Grub paḥi mthaḥi rnam par bshag pa*⁵⁾ (略号, CGN) とであるが、本稿の性格上、特に唯識の学系に関する

1) E. Obermiller, "The Sublime Science of the Great Vehicle to Salvation", *AO*, IX, (1930), p. 99.

2) M. Hattori, *Dignāga, On Perception*, (1968), p. 73 および桂紹隆「ダルマキールティにおける「自己認識」の理論」『南都仏教』第23号(1969), p. 10 など近年のものもすべて上記の Obermiller を典拠とする。

3) grub mthaḥ というチベットにおける著作のジャンルについては、立川武蔵『西藏仏教宗義研究第1巻—トウカン『一切宗教』サキヤ派の章—』東洋文庫(1974), pp. 10—12参照。

4) 東京大学所蔵チベット文献目録(以下東大目録), Nos. 90—95. 本稿が取扱うのは、この第10章(No. 93) "Sems tsam paḥi skabs kyi ḥgrel pa" のごく一部である。

5) 東大目録, Nos. 86—88. 唯識を扱った箇所はこの中の Ka. 112 b⁵—208 a². なお本稿において、JGN よりもこの CGN をより多く参照するのは、後者の方が読みやすいという筆者の恣意によるものであることを諒とせられたい。CGN 全体は目下山口瑞鳳先生により駒沢・東京大学において読みすすめられており近い将来その全貌が明らかにされることと信ずる。

(2) 唯識の学系に関するチベット撰述文献(袴谷)

記述のみを問題とすることにしたい。まず、i) 両書の当該箇所を註記とともに和訳紹介し、次に、ii) その記述の提起する問題点を整理し、最後に、iii) 両書のテキストとしての特殊性に鑑み、⁶⁾ 和訳に応ずるチベット原文を提示することにしよう。従って、本稿はなにか一つの問題を採り上げて論ずる体のものではなく、全くの紹介にすぎぬことを予めお断りしておきたい。

I 原文和訳

JGN (Ña, 6b¹-7a¹)

⁷⁾[唯識学派の]区分についていえば、I) 聖典追従派 (luñ gi rjes ḥbrañ) で [Asaṅga の] <地>の部 (Sa sde)⁸⁾などを主として述べる一派と、II) [Dignāga の Pramāṇa-]samuccaya (Kun btus) と [Dharmakīrti の] 知識根拠 (pramāṇa) に関する七部 (tshad ma sde bdun)⁹⁾を主として把持する論理追従派 (rigs paḥi rjes ḥbrañ) との二派があるが、Bodhibhadra 論師は、「これに関し、瑜伽行派 (Yogācāra) は二種である。有形象派 (rnam pa dañ bcas pa, sākāra) と無形象派 (rnam pa med pa, nirākāra) とである。そのうち、有形象派は Dignāga 論師などであり、無形象派は Asaṅga 論師などである」¹⁰⁾と仰言ったが、Jitāri (Dse tā

6) 蔵外文献であるため一般には入手困難。しかし、東大・東洋文庫所蔵の蔵外文献は他大学の場合とは異なり求めれば入手できよう。他大学の場合も早急に「求めよ、さらば与えられん」という態度を実行して欲しいものである。

7) 以下は、“dbye ba luñ rig rjes ḥbrañ rnam bden rdsun” という rtsa ba (No. 90, 6a¹) に対する説明の一段。これは既に拙稿「<清浄法界>考」(2月23日脱稿、『南都仏教』掲載予定)中で紹介したので重複になるが、先の拙稿では省略した箇所もあり、現時点で未刊行であるから、あえてこの一段全てを提示した。

8) 詳しくは Sa sde lña (<地>の五部)。すなわち、(1) saḥi dños gshi, (2) gshi bsdu ba, (3) rnam graṅs bsdu ba, (4) rnam par bsad paḥi sgo bsdu ba, (5) rnam par gtan la dbab pa bsdu ba の五部全体で Asaṅga の Yogācārabhūmi を指す。cf. CGN, Ka, 115 a²⁻³. Tāranātha, Schiefner, ed., p. 88, l. 7 および Bu ston, Obermiller, tr., I, pp. 54-56 も同じ。

9) CGN, Ka, 116 a³⁻⁴ の列挙順に従うと、(1) rNam ḥgrel, (2) rNam nes, (3) Rigs thig, (4) gTan tshig thig pa, (5) rGyud gshan grub pa, (6) ḥBrel ba brtags pa, (7) rTshod paḥi rigs pa の七論書。宮坂有勝「ダルマキールテイの生涯と作品(上)」『密教文化』No. 91 (1970), pp. 15-29参照。

10) 引用の詳細については、山口益『中観仏教論致』, p. 308 および Y. Kajiyama, “Controversy between the Sākāra- and Nirākāra-vādins of the Yogācāra School — some materials, JIBS, XIV-1, pp. 425-424 参照。

ri)¹¹⁾はまた「多様不二論 (sna tshogs gñis med pa, citrādvaīta)¹²⁾は Dharmakīrti によって御承認された」と説いているが、〔彼の著書である *Pramāṇa-vārttika* (*rNam ḥgrel*) 〔の立場〕を Devendrabuddhi (IHa) と Śākyabuddhi (Śākya) の両者¹³⁾は形象眞実論 (rnam bden) となし、Prajñākaragupta (rGyan mkhan po)¹⁴⁾は主として形象虚偽無垢論 (rnam rdsun dri med) 〔となし〕、Dharmottara (Chos mchog) は主として形象虚偽有垢論 (rnam rdsun dri bcas) と説いた。rGyal tshab¹⁵⁾は「〔Dharmakīrtiの〕七部の立場 (skabs) である唯心 (sems tsam pa) の定立 (rnam bshag) をなすときには、形象虚偽論を規定となさねばならない」¹⁶⁾と仰言っており、mKhas grub rje¹⁷⁾は「このように種々のことが説かれようとも、形象眞実・虚偽論二つのうち形象眞実の宗義 (grub mthaḥ) が深奥なもの (briñ ba) であるから、〔Dharmakīrti の〕七部は形象眞実論であるとせねばならぬことは、多くの聖典および論理によっても知られる」と仰言ったが、そうであろうとも、¹⁸⁾聖典・論理追従派のそれぞれの典籍 (gshuñ) においても、形象の眞実・虚偽論二つづつの主張 (rnam bshag) がありうることを、Tsoñ kha pa 師資 (rJe yab sras) であるインド・チベットのすべての学者が認めるのであるから、この二つの各々を周延させ等しくなしてこじつけるようなことは決してすべきではないのである。

11) Jitāri については、G. Tucci, *Minor Buddhist Texts*, II, pp. 249—252 参照。引用箇所は筆者未詳。

12) 沖和史「Dharmakīrti の〈citrādvaīta〉理論」『印仏研』, XXI-2, pp. 88—94 参照。

13) 両者については、宮坂前掲論文 (上) pp. 39—41, (下)『密教文化』No. 94 (1970), pp. 1—2 参照。サンスクリット呼称はこれに従った。

14) rGyan mkhan po が Prajñākaragupta を指すことについては、Th. Stcherbatsky, *Buddhist Logic*, II, p. 324, n. 2 参照。なお、宮坂同上 (下), pp. 6—7 もあわせて参照されたい。

15) Tsoñ kha pa の弟子 (1364—1462)。Dhar ma rin chen に同じ。CGN では rGyal tshab thams cad mkhen pa として出る。

16) 東大目録, No. 63 からの引用と思われるが、正確な箇所未詳。なおこの引用文末尾は “…byed dgos gsuñs shes gsuñs śiñ /” とあるが下線の gsuñs はなきがごとくに訳した。目下引用箇所の確認が必要。

17) Tsoñ kha pa の弟子 (1385—1438)。CGN では mKhas grub thams cad mkhen pa, mKhas grub smra baḥi ñi ma として出る。なお、rGyal tshab, mKhas grub rje 二人と dGe ḥdun grub (1391—1474) を合した Tsoñ kha pa の三弟子については、Stcherbatsky, *op. cit.*, II, p. 325, n. 1 参照のこと。

18) これ以下、「…決してすべきではないのである」までの文は、CGN ④に引用される。前後の文も合わせて CGN の同段と比較せよ。

(4) 唯識の学系に関するチベット撰述文献(袴谷)

それはまた、形象(rnam pa, ākāra)の観点より(sgo nas)、形象真実・虚偽論の二つは[次のように区分される]。Ⅰ) 形象真実論においては、i) 主客同数論(gzuñ ḥdsin grañs mñam)、ii) 一卵半塊論(sgo ña phyed tshal)、iii) 多様不二論(sna tshogs gñis med, citrādvaita)の三¹⁹⁾、i) 主客同数論には a) <八識身>(rnam śes tshogs brgyad)を認めるものと b) <六識身>(rnam śes tshogs drug)を認めるものとの二、iii) 多様不二論[には] a) <六識身>を説くものと b) <一識>(rnam śes gcig bu)を説くものとの二がある。Ⅱ) 形象虚偽論においては、i) 有垢論(dri bcas)と ii) 無垢論(dri med)との二がある。

また識を認める観点によれば四つである。すなわち、1) <八識身>と 2) <六識身>と 3) <一識>を説くものとの三があるが、4) <九識身>を認める人²⁰⁾も名を馳せて存在するからである。

CGN ① (Ka, 117b¹⁻³)

21)[唯識学派の]区分は、Ⅰ)[Asaṅgaの]<地>の部などに追従し聖典(luñ)を主として述べる聖典追従派と、Ⅱ)[Dharmakīrtiの]知識根拠に関する七部の論書(tshad mañi bstan bcos sde bdun)を經(mdo)²²⁾とともに説明するとき論理追従派との二派ありとするのが最も有名であるが、形象の認め方の観点より区分すれば、形象真実・虚偽論二派があり、それはまた、聖典・論理追従派それぞれにも、形象真実・虚偽論二つづつの主張(rnam bshag)があると多くの典籍(gshuñ)によって説かれるのである。形象真実・虚偽論の内部区分(nañ gses kyi dbye ba)と認め方は後に説明されるであろう²³⁾。

CGN ② (144 b³—145 b⁵)

24)論理追従唯心派(rigs pañi rjes ḥbrañ gi sems tsam pa)は、直観(mñon sum,

19) 以上三つの細分については、後註46)参照。三分の論理的可能性については、沖前掲論文参照。呼称については、現在のところ、citrādvaita 以外は、サンスクリット文献に trace できない。

20) これのみ別格に扱われている。後註37)の箇所を見よ。

21) 以下「所依の典籍より派生した宗義の定立」中、第三としての「区分」。

22) 經(mdo)とは、ここでは、Dignāgaの *Pramāṇasamuccaya* (PS)を指すものと思われる。例えば、CGN, Ka, 149 b⁵では mdo として PS 第9偈を引き、同 150 b¹では *Tshad ma mdo* として PS 第10偈を引用している。

23) 本稿所引 CGN ⑥を指す。

24) 以下「認識主体である知覚の定立」中、第一「一般的知覚の定立」に関する記述の一部。

pratyakṣa) に関して、感覚器官 (dbañ, indriya) と自我意識 (yid, manas) と自己認識 (rañ rig, svasaṃvedana) と瑜伽師 (rnal ḥbyor, yogin) との四つの直観²⁵⁾を認めるのである。聖典追従唯心派 (luñ gi rjes ḥbrañ gi sems tsam pa) は他の三つを認めるけれども、自己認識を認めるか認めないかについては明らかに説いてはいないが、rJe btsun dam pa ḥJam dbyaṅs bshad paḥi rdo rje は、「[Asaṅgaの]〈地〉の部に追従する唯心派は自己認識を認めない。〈地〉の五部 (=Yogācārabhūmi) には説かれていないからである」²⁶⁾と仰言ったのである。そうであるとも、聖典追従唯心派に関して、自己認識を認めないことで充分だとすることは、ḥJam dbyaṅs bshad pa (rJe btsun) 御自身が御承認なさらないのである。なぜなら、御自身は、アーラヤ[識](kun gshi) と自己認識の両者を認める唯心派のものと説いているからである。すなわち *Grub mthaḥ chen mo* (=JGN) における形象真実論の下で、「アーラヤ[識]の〈自性〉は自己認識によって感受される (myoñ bya) ものにほかならず、その力より生じるから、〈分別〉によってそれらが主・客 (gzun ḥdsin) として仮構 (sgro ḥdogs, samā-RUH-) されるけれども、それによって仮構されたような〔主・客の〕二が虚偽なのであって、二でないものは虚偽ではないからである」²⁷⁾と仰言っているからである。

Tarkajvālā によれば、「大乘のものである論師 Asaṅga, Vasubandhu など他のものが」²⁸⁾とあって、彼ら二人が認めることを述べる箇所²⁹⁾で、*Mahāyāna-saṃgraha* (*Theg bsdus*) に説かれている〈三相〉(mtshan ñid gsum, tri-lakṣaṇa) の定立 (rnam bshag) と、アーラヤ[識]と汚れた自我意識 (ñon yid, kliṣṭa-manas) の認め方などを説き、その後、³⁰⁾「その心自身は、かの瑜伽師 (rnal ḥbyor pa) においては、自身として顕現する (rañ du snañ ba, sva-pratibhāsa) 主観の形象 (ḥdsin

25) *Nyāyabindu*, BB VII, pp. 10–11, “tat (=pratyakṣaṃ) caturvidham : indriya-jñānam... mano-vijñānam...sarva-citta-caittānām ātma-saṃvedanam...yogi-jñānaṃ cēti” 参照。

26) 引用箇所未詳。JGN, Ña, 65 a⁶ には “rañ rig kyañ Sa sder ma bśad ciñ (また自己認識は [Asaṅgaの]〈地〉の部には説かれておらず)” とある。

27) JGN, Ña, 68 a⁷–b¹ の文。

28) *Madhyamakahrdayavṛtti-Tarkajvālā*, P. ed., No. 5256, 第5章, 第1偈, Dsa, 219 a².

29) 山口益『仏教における無と有との対論』, pp. 71–164 で取扱われる「前分所破 (Pūrvapakṣa)」を指すと思われる。

30) 以下の正確な引用箇所には当たっていない。山口益同上書によれば、「後分能破 (Uttarapakṣa)」中「識が二性として顕現する義の論破」(pp. 236–256) を指すかと思われる。

paḥi rnam pa, grāhakākāra) と、対象として顕現する (yul du snañ ba, viṣaya-pratibhāsa) 客観の形象 (gzun baḥi rnam pa, grāhyākāra) として変化しつつ (yoñs su gyur) 顕現する。外的対象 (phyi rol gyi don, bāhyārtha) は存在しないから、心のみを観念対象とすること (dmigs pa) に依って、対象を観念対象とせずに生じるが、客観が存在しなければ主観もないから、客観を観念対象としないことに依って、主観である六種の認識を観念対象とせずに生じる。そのかぎり、アーラヤ識である心の本質 (sems kyi chos ŋid) は表象 (rnam par rig pa, vijñapti) といわれるものに住することなく」といって、アーラヤ〔識〕と自己認識の両者を認める規定を説明し、その同じことを否定する箇所において、「対象として顕現することなくして、どのような心自身が顕現するというのか」などというのは、自己認識を否定する論理を仰言ったものである。

また *Madhyamakāvatāra* (*dBu ma la ḥjug pa*) においても、「瑜伽師は師の教誡により」という〔偈〕より「〔内的〕知もないと、この意味を知るべきである」という〔偈〕まで³¹⁾において、〈唯識〉(rnam pa rig pa tsam, vijñaptimātra) を成立する規定を *Mahāyānasamgraha* に出ているとおりに否定され給うたが、その直後に、「もし客観がなく主観すらも離れており」³²⁾などと、〈依他起〉(gshan dbañ, paratantra) を成立させる自己認識を否定する論理が仰言られる前後の結合関係について検討しても、*Asaṅga* などに追従するものには自己認識とアーラヤ〔識〕の両者を認める、ある唯心派のものもあったと思われる。しかしながら、*Madhyamakāvatāra* (*ḥJug pa*) の自己認識を否定するそれらのお言葉によって、論理追従唯心派をも否定できないとは思わない (min) ののである。

CGN ③ (151a⁴—152a¹)

³³⁾一般に、実在 (dños po, vastu) について論ずる宗義を主張するものたちのなかには、1) 〈識身〉(rnam śes tshogs, vijñāna-kāya) を一と認めるもの、2) 二

31) *Madhyamakāvatāra*, BB IX, pp. 163, 第6章, 第69偈—71偈の箇所。

32) *ibid.*, 第72偈を指す。すなわちこの偈以下で論じられる自己認識否定の条に言及している。この条については、山口益前掲書, pp. 283–295 参照。なお、本稿を準備する間に、松本史朗氏の“Candrakīrti’s Criticism of the Svasaṃvedana Theory in the *Madhyamakāvatārabhāṣya*”なる発表(6月19日, 於東洋文庫)を聞き、その発表プリントより多大の益を得たことを記して謝す。氏はまさにこの条を問題とし、CGNのこの箇所にも言及された。

33) 以下「認識主体である知覚の定立」中、第二「識の数の多少の認め方」に関する記述の前半。

と認めるもの、3) 六と認めるもの、4) 七と認めるもの、5) 八と認めるもの、6) 九と認めるものとの六種があると説かれるのである。

1) 第一に関して、アーラヤ識 (*kun gshiḥi rnam śes, ālaya-vijñāna*) だけを認めるものと、〈意識〉 (*yid kyi rnam śes, mano-vijñāna*) だけを認めるものとの二種があると説かれるが、根本の宗義 (*rtsa baḥi grub mthaḥ*) は、「〔識を〕ただ一つであると述べる菩薩」³⁴⁾ということによって認められるものと関連づけて説かれるのである。それはまた、一つの〈識〉自身が、依りどころ (*rten, āśraya*) であるそれぞれの感覚器官 (*dbañ po, indriya*) に依って、それぞれの対象 (*yul, viṣaya*) に向うこと (*rgyu ba*) により、それぞれの〈識〉の名称を得るのであって、たとえば、多くの空洞のある家 (*khañ pa bug mañ po yod pa*) において一つの灯が持ちあげられるごとくである。その〈識〉の一分 (*cha gcig*) が対象 (*don, artha*) として現われ認識されるけれども、執着し分別することはないのである。〔識の他の〕一分が対象として現われたものを執着し分別するのであるから、〈識〉には、全く分別がなくなってしまうという過失はないといい、〈六識〉 (*rnam par śes pa drug, ṣaḍ-vijñāna*) は〈意処〉 (*yid kyi skye mched, mana-āyatana*) であるという経証 (*luñ, āgana*)³⁵⁾を引用するのである。

2) 二と認めるのは、〈染汚意〉 (*ñon yid, kliṣṭa-manas*) と〈転識〉 (*ḥjug śes, pravṛtti-vijñāna*) との二つを認めると、*Kha che Lakṣmi*³⁶⁾が説いたものである。

4) 七と認めるのは、〈六〔識〕身〉 (*tshogs drug, ṣaḍ-vijñāna-kāya*) と〈執持識〉 (*len paḥi rnam śes, ādāna-vijñāna*) とを認めるのであるとも明確に説かれているものである。

6) 九と認めるのは、真諦 (*Yañ dag bden pa*)³⁷⁾論師が認めて説いたものである。〈六〔識〕身〉と〈執持識〉とアーラヤ〔識〕と〈無垢識〉 (*dri ma med paḥi*

34) *Mahāyānasamgraha*(MS), Lamotte ed., II, §12を指す。MSBh (P. ed., No, 5551, Li, 173 a⁶) に “byañ chub sems dpaḥ kha cig ni yid kyi rnam par śes pa gcig bu ñid du ḥdod do//” とある。

35) “yañ skye mched bcu gñis bstan pa las rnam per śes paḥi tshogs drug ni yid kyi skye mched do ṣes ji skad gsuñs pa lta buḥo//” (MS, *ibid*).

36) JGN, Ña, 78 b¹ に “Kha cheḥi mkhas pa Lakṣmis *Rim lña ḥgrel par*” とあるにより、P. ed., No. 2905, *Rim pa lña ḥgrel pa rim paḥi don gsal bar byed pa shes bya ba* の著者、dPal Lakṣmi のことと推測しうる。

37) *Yañ dag bden pa* は、恐らく、漢訳名「真諦」からの訳出と思われる。以下に述べられる内容から判断しても真諦三蔵の識説が伝わっていたものらしい。

(8) 唯識の学系に関するチベット撰述文献(袴谷)

rnam śes, amala-vijñāna) とで九つである。

3) <六〔識〕身>を認めるのは、〔Dharmakīrti の〕七部に追従する唯心派 (sems tsam pa) であり、そして、

5) 八と認めるのは、〔Asaṅga の〕<地>の部などに出ているような聖典追従唯心派である。

以上のものであるとしても、その他の大部の典籍 (gṣuñ rgyas pa) はチベットに翻訳されず有名でもない (grags chuñ ba) からここでは論じる必要はない³⁸⁾。

CGN ④ (155a⁵—b⁵)

³⁹⁾論師 Bodhibhadra は「Asaṅga 師資は形象虚偽論 (rnam rdsun pa) であり、Dignāga 師資は形象真実論 (rnam bden pa) である」⁴⁰⁾と説くけれども、しかしながら、〔Dharmakīrti の〕七部を経 (mdo)⁴¹⁾とともにもつものの意図が形象真実論であるというのは確定したものではない。なぜなら、Devendrabuddhi (IHa dbaṅ blo) と Śākyabuddhi (Śākya blo) は〔Pramāṇa-〕vārttika (rNam ḥgrel) の意図を形象真実論と解釈 (bkral) し、Prajñākaragupta (Śes rab ḥbyuñ gnas sbas pa) は形象虚偽無垢論 (rnam rdsun dri med) [と解釈し]、論師 Dharmottara は形象虚偽有垢論 (rnam rdsun dri bcas) と解釈するからである。Asaṅga 師資の意図も形象虚偽論と確定しているわけではない。なぜなら、Tarkajvālā (rTog ge ḥbar ba) において、彼ら〔Asaṅga 師資〕が御承認なさることを否定する箇所 (skabs) は、形象真実論が認めることを説いているからである。それゆえ、「聖典・論理追従派のそれぞれの典籍においても、形象の真実・虚偽論二つづつの主張がありうることを、Tsoñ kha pa 師資であるインド・チベットのすべての学者が認めるのであるから、この二つの各々を周延させ等しくなしてこじつけるようなことは決してすべきではないのである」⁴²⁾と rJe btsun dam pa ḥJam dbyaṅs

38) 以下「論じる必要はないが、<六〔識〕身>と認められるものはまた知られやすいから、ここでは<八識身>中のアーラヤ〔識〕と汚れた自我意識の認め方をいささか述べるべきである。」と続くが、ここには省略する。

39) この CGN ④と以下の CGN ⑤の記述は、「認識主体である知覚の定立」中、第三形象が真実か虚偽かという区別」について「根本」(dños) を述べたもの。

40) 引用箇所未詳。師資 (yab sras) などの言葉からみてそのままの引用ではないかもしれない。しかし、直接の引用であろうが、あるいは、前註10) の言い換えであろうが、いずれにせよ、CGN は Bodhibhadra が無形象派＝形象虚偽論、有形象派＝形象真実論と考えていたとみなしていることは明白。

41) 前註22) 参照。

42) 前註18) で指摘した箇所の引用。

bshad paḥi rdo rje が仰言ったことは非常によいことであるから、我々も、まったくそのとおりに認めるのである。

CGN ⑤ (157a⁵—b⁵)

真実論・虚偽論の区別について。

I) 唯心形象真実論者 (sems tsam rnam bden pa) は、感覚器官 (dbañ po, indriya) の直観 (mñon sum, pratyakṣa) において主・客 (gzun ḥdsin, grāhya-grāhaka) が分離して (rgyañ chad du) 顕現する〔場合〕と、青 (sño, nīla) などの外的対象 (phyi rol don, bāhyārtha) として顕現する〔場合〕と、名称 (miñ) と言語 (tha sñad) の基体 (gshi) として個別相 (rañ mtshan, svalakṣaṇa) によって顕現する場合 (cha) には、〈無明〉の影響 (bslad pa) があるけれども、青などのごとき粗大なもの (rags pa, sthūla) として顕現する場合には、〈無明〉の影響はいささかもないと認める (ḥdod)⁴³⁾のである。

II) 形象虚偽論者たち (rnam rdsun pa rnams) は、〈凡夫〉 (so so skye bo, pṛthagjana) の〈相続〉 (rgyud, saṃtāna) においては、自己認識 (rañ rig, svasaṃvedana) である直観を除けば、〈無明〉によって損われない (ma bslad pa) 直観知 (mñon sum gyi śes pa, pratyakṣa-jñāna) は存在しないから、青などのごとき粗大なものとして顕現する場合にも、錯乱 (ḥkhrul ba, bhrānti) の影響があると御承認なさる (bshed)⁴⁴⁾のである。

それゆえ、形象真実論者は、そのごとき (de lta bu) 粗大な形象として顕現するものも、知 (śes pa, jñāna) 自身の実質 (rdsas) であるから、無錯乱 (ma ḥkhrul ba) であると認めるが、形象虚偽論者は、粗大なものが明瞭に顕現するものは、たとえ知の実質であっても、そのごとき粗大なものとして顕現する場合 (cha) は、無明によって損われた力によって顕現する錯乱したもの (ḥkhrul ba ḥbaḥ shig) として認めるのである。それを意図して、形象真実論者に対しては形象が実体 (dños po) であると認めるもの、形象虚偽論者に対しては形象が無実体 (dños po med pa) であると認めるもの、という定義 (tha sñad) が、インド・チベットの学者たちによって説かれるのである。

43) 文頭の「唯心形象真実論者」を受ける動詞。次註の箇所と比較せよ。

44) 文頭の「形象虚偽論者たち」を受ける動詞。前註の ḥdod に対し、その尊敬語である bshed が使用されていることに注意。

CGN ⑥ (Ka, 158b²—160a³)

45) [唯識学派の内部] 区分。

I) 形象真実論に関していえば、i) 一卵半魂論 (sgo ña phyed tshal) と ii) 主客同数論 (gzun ḥdsin graṅs mñam pa) と iii) 多様不二論 (sna tshogs gñis med pa, citrādvaita) とで三つあるが、それらの規定(tshul)は外的対象(phyi don, bāhyārtha)を認めないことを別にすれば、経量部の箇所(skabs)⁴⁶⁾と同様である。

II) 形象虚偽論に関していえば、i) 有垢論(dri bcas)と ii) 無垢論(dri med)との二つである。この両者の区別についていえば、

(1) <世俗>(kun rdsob, saṃvṛti)のすべての顕現(snañ ba, ābhāsa)は、<無明>(ma rig, avidyā)の<熏習>(bag chags, vāsanā)の力によって顕現したものであるから、それ(=<無明>)が転換したならば(log na), [<世俗>の顕現も]転換する(ldog pa)から、仏には虚偽の顕現はないと認めるのが無垢論であり、<世俗>の顕現は<無明>と結びついたもの(ḥbrel ba)はいささかもないがゆえに、それ(=<無明>)が転換したとしても、[<世俗>の顕現が]転換することはないから、<仏>にも虚偽の顕現があると認めるのが有垢論である⁴⁷⁾、という[以上のような]説き方が一つと、

(2) また、[仏が]形象を知り給うこと(rnam mkhyen, ākāra-jñā)に関し、一切が顕現するか顕現しないかに区別はない(khyad par med)けれども、その規定(tshul)を多く採用するか採用しないか(bsgrub mi bsgrub)によって有垢論か無垢論かを立てる、たとえば、<声聞>・<独覚>(ñan rañ)は<種姓>が確定せること(rigs ñes)によって<法無我>(chos kyi bdag med, dharma-nairātmya)を悟らぬものということと一致しているけれども、そのように説くことが多いか少ないか(mañ mi mañ)によって、<法無我>を悟ることがあるかないかを認める自立の二派(rañ rgyud pa gñis)と称されるもののごとくである⁴⁸⁾、という[以上

45) 前註39)と同主題で、先の「根本」に対して特にその内部の「区分」に言及する箇所。

46) CGN, Ka, 87 a³⁻⁵に「知(śes pa, jñāna)が形象を有すると認める仕方に三つある。一つの知に多くの形象が現われる(ḥchar ba)と主張する(khas len pa)多様不二論と、一つの知に形象も一つのみ現われると主張する一卵半魂論と、多くの形象が現われるならば知もまた多くあると主張する主客同数論との三つである。」とある。

47) 「転換」という質的变化を境にして虚偽の顕現の有無を論ずる。

48) かような自立の二派に関して筆者未詳。JGN, Ña, 74a⁵⁻⁶にも全くの同文で言及がある。いずれにせよ、上註の箇所に比して量的程度の差が判断の基準になるものと思われる。

のような] 説き方が一つと、

(3) また、心の〈自性〉(no bo, svabhāva) に〔主・客の〕二は顕現するが、〔それは〕〈垢〉(dri ma, mala) によって損われたものである (bslad pa) と認めるのが有垢論であり、〈垢〉は偶然的なもの (blo bur ba, āgantuka) であるから、心の〈自性〉にはいささかも損われたものはないと認めるのが無垢論である⁴⁹⁾、という〔以上のような〕説き方〔計〕三つが出ているが、前の二つが非常に有名 (grags che) であり、三つの規定とも (lugs gsum ka) 〔Asaṅga の〕〈地〉の部や〔Dharmakīrti の〕認識根拠に関する七部や Jitāri (Dse ta ri) などの権威ある典籍 (luñ) を多く引用するのである。mKhas grub thams cad mkhyen pa⁵⁰⁾は、sDe bdun Yid kyi mun sel⁵¹⁾において、前の規定の側のみを説くのである。これら形象虚偽二論 (=有垢論・無垢論) の区別を、Tsoñ kha pa 師資 (rJe yab sras) が詳細に確認されたものはみられず、特に、「心の〈自性〉に〔主・客の〕二は顕現するが、〔それは〕〈垢〉によって損われたものである」と認めることも、形象虚偽有垢論の規定として成立しがたいものである。仏において〔主・客の〕二の顕現があるという意味を、Samtānāntarasiddhiṭīkā (rGyud gshan bsgrub paḥi ḥgrel pa)⁵²⁾においてVinītadeva (Dul ba lha) が「〔仏の〕その〈智〉(ye śes, jñāna) は、主・客 (gzun ḥdsin, grāhya-grāhaka) 〔の二〕を伴っていても、転換したもの (log pa nid) として御覧になる (gzigs pa) からである」というような意味に考えて、主・客の二の顕現を有とも無ともなすと認めることは、一般に〈仏地〉(sañs rgyas kyi sa, buddha-bhūmi) においてそれぞれの対象 (yul, viṣaya) をもつ顕現が絶対に無である (gtan med pa) と言うならば、〔その〕不成立 (mi ḥthad pa) は理解しやすいし、主・客が分離して (rgyañ chad du) 顕現することが〈仏地〉にもあると言うならば、この規定には大変な矛盾 (sin tu ḥgal) があるのである。それゆえ、規定の形態 (par ba) についていささか説くことがあろうとも、ある決定的判断 (mthaḥ chod pa shig) は困難に思われる。これらを始めとして、述べるべきことは非常に多いが、しばらくは置く。

49) 〈如来蔵〉的な考えが判断基準になっていると思われる。しかし、後の記述で前二者に対してあまり有名でないように取扱われるのはどうしたわけか。あるいは、〈如来蔵〉的な Jo nam pa の教義がチベット仏教の正統説から排斥されたことと関係があるのか。

50) 前註17) と同一人物。

51) この書は Stcherbatsky, *op. cit.*, II, p. 325, n. 1 で言及されている。

52) P. ed., No. 5724. 以下の引用箇所は確認していない。

(12) 唯識の学系に関するチベット撰述文献（袴谷）

形象真実・虚偽論二つのうち、形象虚偽論 (rnam rdsun) の定義が深奥である (brin ba) と rGyal tshab thams cad mkhyen pa⁵³⁾ は御承認され (bshed), mKhas grub thams cad mkhyen pa は形象真実多様不二論 (rnam bden sna tshogs gñis med) の宗義が深奥であると説く (bśad) ののである。その両者とも各自のその説き方は Tson kha pa (rJe bdag ñid chen po) の意図であるとおっしゃっているのであるから、一般にそれら希有な大菩薩たちの意図がどのようなものであるかを私ごときものがどうして知ることができよう。しかしながら、〔Dharmakīrti の〕七部の主題 (skor) に関して、rGyal tshab thams cad mkhyen pa は大学者 (pañ chen) Dharmottara の註釈を主としてお作りになり、mKhas grub smra bañi ñi ma⁵⁴⁾ は Devendrabuddhi (lHa dbañ blo) の註釈を主としてお作りになったのであるから、Tson kha pa が〔Pramāṇa-〕vārttika (rNam ḥgrel) の説を与え給うた (gnañ ba) 時に、それぞれの註釈の規定に依って説明した仕方に区別 (khyad par) が生じたものではないかと思うのである。

II 問題提起

以上、JGN および CGN より、唯識の学系に言及する関連箇所を抽出し、和訳によってこれを提示した。和訳中には、具体的内容に関して不明のまま残された箇所も多かったし、またこの種の無知のために思わぬ誤訳が潜んでいるかもしれぬが、大略の記述内容は伝いえたと思う。ここでは、この記述を整理し、更にこれが我々に提起する問題点を指摘することにした。

さて、以上に示した JGN, CGN の記述は、E. Obermiller の紹介する学系と基本的には一致する。従って彼はなんらかの形においてこの種のチベット文献を典拠としたと思われる。今、比較を容易にするため、彼の紹介した学系を図示することにしよう⁵⁵⁾。

- I) Asaṅga, Vasubandhu の学系
聖典追従派 — ālaya-vijñāna の理論を主張
- II) Dignāga の学系
論理追従派 — ālaya-vijñāna の存在を認めない
(その機能を〈六識身〉中に配分)

53) 前註15) と同一人物。彼に対しては bshed と尊敬語を使用。次の mKhas grub rje に対しては bśad とする。対応する動詞ではないが前註 43), 44) で指摘したのと同様のことがいえる。

54) 前註17) と同一人物。

55) 前註1) で挙げた箇所を参照のこと。

JGN, *CGN* に比べて極めて簡単な記述であるから、殊さら問題とすべき点もないと思われるが、呼称に関しては注意をむける必要がある。ここで仮りに聖典追従派・論理追従派として示した呼称について、Obermiller は *luñ gi rjes ḥbraṅs, rigs paḥi rjes ḥbraṅs* という *JGN*, *CGN* と同じチベット語を挙げながら、実際にはそれぞれを *āgama-amusārin*, *nyāya-anusārin* と還元しているから、元来インドにあった呼称とみなしたのであろう。それゆえ、彼以降の学者もむしろサンスクリットの呼称を用いるようである⁵⁶⁾。しかし、筆者としてはその裏付けとなるような箇所がサンスクリットもしくはその翻訳文献中に指摘された例を聞かない。もっとも山口益博士は、*āgama-anusārin* については、*Sthiramati* の *Madhyāntavibhāgaṭīkā* の第二章以下各章の終りでこの呼称が形容詞として用いられる例を指摘されている⁵⁷⁾。これは非常に示唆に富む指摘であることに間違いはないが、これを直ちに *nyāya-anusārin* と対になる学系呼称の典拠とはみなせないであろう。筆者としては、今後文献的裏付けが進むことを期待しながらも、現段階では、*luñ gi rjes ḥbraṅs, rigs paḥi rjes ḥbraṅs* をチベット仏教の伝統における学系の呼称とみなし、その伝統に添って呼称の意味を考えるのが最も妥当であろうと考える。

JGN, *CGN* の文脈における両呼称の意味は、既に和訳中で明らかであろう。それによれば、*luñ gi rjes ḥbraṅ(s)* は「〔*Asaṅga* の〕〈地〉の部などを主として述べるもの (*Sa sde sogs gtso bor smra ba*)」(*JGN*) あるいは「〔*Asaṅga* の〕〈地〉の部などに追従し聖典を主として述べるもの (*Sa sde sogs kyi rjes ḥbraṅs luñ gtso bor smra ba*)」(*CGN*①) と内容が限定され、*rigs paḥi rjes ḥbraṅ(s)* は「〔*Dignāga* の *Pramāṇa-*〕*samuccaya* と〔*Dharmakīrti* の〕知識根拠に関する七部を主として把持するもの (*Kun btus dañ Tshad ma sde bdun gtso bor ḥdsin pa*)」(*JGN*) あるいは「〔*Dharmakīrti* の〕知識根拠に関する七部の論書を経とともに説明するときもの (*Tshad maḥi bstan bcos sde bdun mdo dañ bcas pa nas bśad pa ltar*)」(*CGN*①) と内容が限定されている。このことから分るように、*luñ gi rjes ḥbraṅ(s)* の *luñ* (聖典) とは、主として *Asaṅga* の〈地〉の部、すなわち *Yogācārabhūmi* を指すのである⁵⁸⁾。「〔*Asaṅga* の〕〈地〉の部に追従する唯心

56) 前註2) で挙げた論文においては、すべてサンスクリット名のみが採用される。

57) 山口益『中観仏教論攷』, p. 314, n. 8.

58) 詳しくは前註8) を見よ。

(14) 唯識の学系に関するチベット撰述文献（袴谷）

派 (*Sa sdeḥi rjes ḥbraṅ gi sems tsam pa*)」(CGN②)などの呼称は端的にこの点を示している。同様に、*rigs paḥi rjes ḥbraṅ(s)* の *rigs pa* (論理)とは具体的には *Dignāga* の *Pramāṇasamuccaya* と *Dharmakīrti* の七部の論書を指している。しかもこの後者の場合は、むしろ *Dharmakīrti* の七部の論書の方が前面に押出されていることに注意されたい⁵⁹⁾。たとえば、CGN③のように、「七部に追従する唯心派 (*sde bdun gyi rjes ḥbraṅ gi sems tsam pa*)」などという呼称でこの学系が代表されているのは、その好い例である。また、前者の場合、*luṅ* とは、チベット仏教の伝統においては、主として *Asaṅga* の *Yogācārabhūmi* のことであることが明瞭なのであるから、その伝承における呼称だけを借用しておきながら、呼称の当体である *Asaṅga* をこの同名の系統から外すなどということは方法的に到底首肯しがたいことといわねばならない⁶⁰⁾。

これに反し、既に学界に知られた *Bodhibhadra* の記述から、我々は、*Asaṅga* の系統を無形象派 (*rnam pa med pa, nirākāra*) と呼び、*Dignāga* の系統を有形象派 (*rnam pa daṅ bcas pa, sākāra*) と呼ぶ習わしがインドに淵源をもつものであることを知っている。この両系統にそれぞれ対応するものが聖典追従派・論理追従派の呼称であることは *JGN・CGN* の記述から確かである。しかしながら、形象虚偽論・形象真実論の名称を同じように両系統のそれぞれ一方だけに冠することは *JGN・CGN* の記述が認めていない。両記述とも究極的には、この両系統、すなわち聖典追従派＝無形象派および論理追従派＝有形象派それぞれに、ともに形象虚偽論・形象真実論二つづつの立場があることを認めているからである。しかも、形象が虚偽か真実かの議論が極めて重要であったことはその記述内容から窺い知ることができる。しかし、元来はやはり、無形象派＝形象虚偽論、有形象派＝形象真実論であったであろうことは、CGN④において、「論師 *Bodhibhadra* は、*Asaṅga* 師資は形象虚偽論であり、*Dignāga* 師資は形象真実論であると説く」⁶¹⁾ と述べられていることから判断しうる。この判断を加味して、既に周知の *Bodhibhadra* の学系記述から、その作図を試みれば次のごとくになる⁶²⁾。

59) これは、後註63)でも触れるように、後世の議論がもっぱら *Dharmakīrti* の立場の解釈を巡って展開されるのと無関係ではあるまい。

60) 例えば、桂紹隆前掲論文、p. 10 と p. 16 とにおける所論を比較せよ。

61) 前註40)で触れたように、*Bodhibhadra* の著作からの直接引用か否か不明であるが、少なくとも *CGN* がかく判断したことは確かであろう。

62) 前註10)に示した文献によって実際の記述を確認されたい。

I) *Asaṅga* の系統

無形象派＝形象虚偽論

<八識身>を主張 (<一識>のみを主張するものもある)

II) *Dignāga* の系統

有形象派＝形象真実論

<六識身>を主張 (<一識>のみを主張するものもある)

これに、*JGN* の記述における 形象虚偽論・形象真実論両系統に関する細分を加えて、人工的に導かれる学系図は次のようになろう。

- (I) *Asaṅga* の系統
 (聖典追従派＝無形象派＝) 形象虚偽論
 i) 有垢論 ii) 無垢論
- (II) *Dignāga* の系統
 (論理追従派＝有形象派＝) 形象真実論
 i) 主客同数論 { a) <八識身>を認めるもの
 { b) <六識身>を認めるもの
 ii) 一卵半魂論
 iii) 多様不二論 { a) <六識身>を認めるもの
 { b) <一識>のみを認めるもの

CGN の場合も、識の認め方の記述を別にすれば、これと同様な作図が可能である。この作図が人工的であるというのはカッコ内を補ったためであり、もしカッコ内を全て除去すれば、忠実に記述を再現したことになる。しかし、今ここで人工的に導かれた学系図が、*ḥJam dbyañ bshad pa* や *lCañ skya* の念頭に全然去来しなかったわけではあるまい。たとえば、*CGN*④の「*Asaṅga* 師資の意図も形象虚偽論と確定しているわけではない」あるいは「〔*Dharmakīrti* の〕七部を経とともにもつものの意図が形象真実論であるというのは確定したものではない」という論じ方も、一般に *Asaṅga* の系統が形象虚偽論、*Dignāga* の系統が形象真実論であるという見方が確定していた状況を想定した上でなければ、ありえないことのように思われるからである。しかも、ここで注目すべきことは、形象が虚偽か真実かという議論は、一般に確定していたと思われる *Asaṅga* の系統、*Dignāga* の系統を直接問題とするというよりは、ほとんどが *Dharmakīrti* に集中して論じられているということである⁶³⁾。それゆえ、上記二系統に、形象真実・虚偽論が複雑に絡み合っていくのは、むしろ後代の、*Dharmakīrti* の立場

63) 学系名としても *Dharmakīrti* の七部 (*sde bdun*) が前面に出る。本稿註59参照。

(16) 唯識の学系に関するチベット撰述文献（袴谷）

の解釈を巡る様々な議論の、前代への反映と思われる。

以下に、Dharmakīrti の *Pramāṇavārttika* (PV) の解釈に関する議論を JGN, CGN の記述に従ってまとめてみよう。

	PVの解釈者	PVに対する解釈呼称
インド	Devendrabuddhi Śākyabuddhi	形象真実論
	Prajñākaragupta	形象虚偽無垢論
	Dharmottara	形象虚偽有垢論
チベット	rGyal tshab	形象虚偽論
	mKhas grub rje	形象真実論 (JGN) 形象真実多様不二論 (CGN)

この図から、PV 解釈の立場上、Devendrabuddhi, Śākyabuddhi 両者と mKhas grub rje が近く、また Prajñākaragupta と Dharmottara のいずれかと rGyal tshab が近いことが推測される。さらに CGN⁶⁴ の末尾によれば、rGyal tshab は Dharmottara の注釈を主として作ったことが明示されているが、その書き様から判じて、rGyal tshab は PV を形象虚偽論中の特に有垢論とみる立場、すなわち Dharmottara の立場により近いとみなされていたと推測される。

以上のことを念頭に置くと、Th. Stcherbatsky が PV の註釈者たちを三系統に区分した記述に非常な興味をそそられる。彼の記するところによれば、三系統は次のごとくである⁶⁴。

a) 文献学派 (Philological School)

インドの学者——Devendrabuddhi, Śākyabuddhi

チベットの学者——mKhas grub rje

b) 哲学学派 (Philosophic School)

インドの学者——Dharmottara

チベットの学者——rGyal tshab

64) Stcherbatsky, *op. cit.*, I, pp. 39–45. 彼はこの三系統を記述するにあたり, “The works preserved in Tibetan translations may be divided in three groups, according to the leading principles by which the work of interpretation was guided.” とことわっている。それによって註釈の仕事が導かれた leading principles とは一体なにを典拠として言ったものか。もしチベット伝によるなら、これもやがては確認されねばならない。

c) 宗教学派 (Religious School)

インドの学者——Prajñākaragupta

チベットにおいては特別な継承者をもたない⁶⁵⁾

これは先に示した図と驚くべき対応を示しているといえよう。もっとも、両者はともに同じ Dharmakīrti の PV に関する解釈の立場を叙したものであるから、その符合は当然ともいえるが、異った観点による両者の記述が合致することは、逆にその客観性を保証していることにもなる。それゆえ、ここでは、Dharmakīrti の PV 解釈について、両者一括したものを図示しておく。

P V の 解 釈 者				PV に対する 一般的態度	形象の認め方
イ ン ド	Devendrabuddhi Śākyabuddhi	チ ベ ット	mKhas grub rje	philological	形象真実論
	Dharmottara		Gyal tshab	philosophic	形象虚偽有垢論
	Prajñākaragupta		特別な継承者なし	religious	形象虚偽無垢論

Dharmakīrti を巡って、上述のごとき展開があったことは、PV が純粹に論理学的方面で処理されたわけではないことを示している。これは、すなわち、PV 解釈が哲学的・宗教的色彩を強めたことを意味する。それが特にチベットにおいて濃厚に現われていることは、既に Stcherbatsky も指摘するとおりである⁶⁶⁾。この意味において、CGN が形象真実論よりも形象虚偽論を高く評価したことが、後者に対する敬語法から窺える⁶⁷⁾のは興味深いことと思われる。

ところで、Dharmakīrti に関する様々な解釈を除外して考えれば、元来、形象虚偽論とは無形象派の主張、形象真実論とは有形象派の主張であったとみてよく、それは Bodhibhadra の記述に関する処理の仕方において現われていることは既に指摘したとおりである⁶⁸⁾。また両者の内容上の区別についても、CGN ⑤が述べるように、「形象真実論者に対しては形象が実体であると認めるもの、形象虚偽論に対しては形象が無実体であると認めるもの」という定義が与えられていたのであるから、形象が実体として真実にあると認めるものは当然有形象派であり、逆に形象は無実体でありそれゆえに虚偽なものとして本来的にはないと認めるも

65) しかし、この系統として Śāntiraksita, Kamalaśīla が挙げられていることに注意。

66) Stcherbratsky, *op. cit.*, I, pp. 57-58.

67) 前註43), 44), 53) 参照。

68) 前註61) 参照。

のは無形象派ということになる。しかし、実際は Dharmakīrti の解釈を巡って、この二つの考え方が複雑に絡み合って錯綜した様相を呈した。しかもそれは Dharmakīrti に従うもの、すなわち論理追従派の議論であるわけであるから、論理追従派＝有形象派に形象真実・虚偽論の二つがあると考えねばならぬようになった。他方、明確に Asaṅga の系統に立場を置くもの、すなわち聖典追従派にも、Dharmakīrti の絶大な影響のもとに、本来の形象虚偽論の立場を守ることができず、形象真実論に接近した考えをとるものも現われるに到った。しかして、論理追従派同様、聖典追従派＝無形象派にも形象虚偽・真実論の二つがあるかのような様相を呈した。これが歴史的展開の事実ではなかったかと思われる。既に指摘したように、CGN④が「Asaṅga 師資の意図も形象虚偽論と確定しているわけではない」と述べ、その理由として「Tarkajvālā において、彼ら〔Asaṅga 師資〕が御承認なされることを否定する箇所は、形象真実論が認めることを説いているからである」とするのは多少ともこの事実に触れた記述である。CGN②はこの点に関するさらに詳細な考察とみることができよう。

聖典追従派＝無形象派および論理追従派＝有形象派のそれぞれに形象虚偽論と形象真実論とがあったということは、以上のような事実を反映したものと考えられるが、この種の報告が現代の学者によってなされたことを筆者は寡聞にして知らない⁶⁹⁾。JGN, CGN の記述年代は遙かに後世のものであるが、インド仏教史の問題を自らの思索と化したチベット学僧たちの、連綿と続いた歴史のなかに生まれたこれらの記述が、インドに淵源をもたぬことを伝えたとは考えられない。今後とも Dharmakīrti 以降のインド側の文献に当って充分確認する価値のある記述と思われる。遺憾ながら筆者は Dharmakīrti 以降の文献に疎く、現在のままでは満足な問題提起も適わぬが、たとえば、有形象派の⁷⁰⁾ Prajñākaragupta が Dharmakīrti の PV の立場を形象虚偽無垢論と解釈したとすれば、どうしても上述の視点を導入して論じなおす必要があるのではないかと思う。有形象派すなわち形象真実論のみとすれば、形象虚偽無垢論などの入る余地は全くないから

69) 註記を付す段階で、一郷正道『中観莊嚴論註』の和訳研究(1)『京都産業大学論集』第2巻(人文科学系列第1号),(1972), p.199, n.18 により、少なくとも、有形象論に関して、形象が真実か虚偽かの議論のあったことを知った。

70) 沖和史「〈citrādvaita〉理論の展開—Prajñākaragupta の論述—」『東海仏教』第20輯,(1975), pp.94-81 では明確に有形象派として位置づけられている。

である⁷¹⁾。かといって、Prajñākaragupta が Dharmakīrti の PV の立場を形象虚偽無垢論としたとする JGN, CGN の記述自体を誤りと即断することは許されないであろう。もっとも、形象虚偽論・形象真実論に関しては、その敬語法にもみられたように、前者を高く評価する伝統のうちにあったことは確からしい⁷²⁾が、このように三種の立場を客観的に記述する場合に、ことさら事実を歪曲することはなかつたと思われるのである。もし歪曲があったとすれば、これと対応する Stcherbatsky の区分に従う学者の⁷³⁾ Dharmakīrti 以降のインド論理学史に関する記述も変更を余儀なくされるであろう。

以上、唯識学派の二系統に注目しながら、JGN, CGN の記述をまとめ、いささか問題となる点を指摘した。しかし、識の数の認め方に関しては言及を避けてきたので、ここで一括して採り上げたい。図示はしなかったが、この点に関する最も詳細な記述は CGN③に示されるものである。そこには識の数の認め方に関して六種の主張が列挙されるが、すべてについて唯識学派の二系統との関係が明示されるわけではなく、3) <六識>を認めるものと4) <八識>を認めるものについてのみ、それぞれが論理追従派、聖典追従派に配当されているにすぎない。このことは計らずも、3) と4) の立場がそれぞれ両系統を代表する識論だったことを物語るものであろう。これは Obermiller の伝えるもの、あるいは Bodhibhadra の記述と全く一致する。ただし、後者は<一識>のみを主張するものが両系統にもありうることを附記しているが、これは CGN③の1) の立場に反映されているとみてよいであろう。1) の立場はアーラヤ識のみを認めるも

71) 余地があるという観点から参考になったものは、L. Schmithausen, *Der Nirvāṇa-Abschnitt in der Viṃścayasamgrhaṇi der Yogācārabhūmiḥ*, p. 95. 彼はここで PV-alamkāra の文 “tadabhyāsād āsrayaḥ parivartate” (Patna, p. 142. l. 30 f) 中, “āsrayaḥ parivartate” を「根源すなわち心相統, あるいは ālaya-vijñāna の浄化が結果される」と読み込んでいる。この読み込みが可能なら、CGN⑥Ⅱの1)の基準に照して虚偽論とみなしうる。なお、渡辺照宏「撰真実論序章の翻訳研究」『東洋学研究』, No. 2, (1967), pp. 25—27 によれば、無形象派としての Dharmakīrti—Śāntirakṣita の線が示される。これに関し、前註65) の Stcherbatsky の記述を考慮すれば形象虚偽無垢論としての Dharmakīrti—Prajñākaragupta—Śāntirakṣita の線を想定することもできる。

72) Tsoñ kha pa の弟子中 rGyal tshab の方が正統を汲むとされる。なお、チベット仏教史を正確に辿るためには、佐藤道郎「Prāsaṅgika の軌跡」『日本西蔵学会々報』第22号, pp. 1—3 などに見られるような視点を唯識の学系に関しても持たねばならない。

73) Dalsukhbhai Malvania, *Dharmottarapradīpa*, TSWS Ⅱ, intro., pp. xix—xxi, あるいは宮坂前掲論文(上), pp. 34—35 など Stcherbatsky の区分に従う。

のと、〈意識〉だけを認めるものとの両系統を含むものだからである⁷⁴⁾。その究極的典拠は *Mahāyānasamgraha* に示される〈一識説〉だとされているが、これは、かつて宇井博士が「撰大乘論の一識説」⁷⁵⁾として問題を提起された有名な箇所であり、*Bodhibhadra, CGN* の記述を結んで考えると、インドでもかなり後世までこの箇所が問題となっていたのではないかと推察される。

さて、識の数の認め方に関しては、*JGN* の記述のみが異っており⁷⁶⁾、これが問題を複雑にする。*JGN* では、識の数に関する異説は、〈九識〉を認めるもの以外、すべて形象眞実論のもとに列挙されている。記述様式は簡明であるが、先に言及した聖典追従派＝無形象派および論理追従派＝有形象派における形象虚偽・眞実論のあり方を想起するなら事情は簡単ではない。単純な推測が許されるなら、論理追従派＝有形象派の系統におけると同様、聖典追従派＝無形象派の系統にも、形象眞実論のもとに列挙されたものと同じだけの異説があったと認めねばならぬであろう。しかしこのような機械的な敷衍が許されるか否か、なお今後の研究に俟たねばならない。ただここで注意を払うべきことは、この記述が形象が眞実か虚偽かという、いわば *Dharmakīrti* 以降の観点 (*sgo nas*) から言及されているということである。しかも、形象虚偽論のもとにこの種の異説が列挙されないのは、虚偽論が〈八識〉を認めることで一貫した立場をとっていたためかもしれない。なお、*JGN* では、以上の問題とは全く別格の態で、〈九識〉を認めるものが紹介されている。これは *CGN* ③の 6) の記述に対応するが、後者によれば眞諦 (*Yañ dag bden*) 論師の説とされるから、あるいは中国仏教における解釈が伝えられていたかもしれぬ⁷⁷⁾。

* * *

以上、問題点を列挙するに止まったが、これは *JGN, CGN* という氷山の一角から零れ落ちた問題にすぎぬ。落ちた片々に誤りありとすれば、それは氷山全体を見れない筆者の過失である。もし価値ありとすれば、それは両書自体に由来

74) アーラヤ識のみを認めるものを聖典追従派、〈意識〉のみを認めるものを論理追従派とみなしたいが、*CGN* 自体では決定的なことは不明。

75) 宇井伯寿『印度哲学研究』第5, pp. 5—13所収。

76) ただし、*CGN* ③に対応する *JGN, Ņa, 78 b¹* では、“*mdor bsdu na dños smra la rnam par śes pa gcig tu ḥdod pa dañ / gñis su ḥdod pa dañ / drug tu ḥdod pa dañ / bdun du ḥdod pa dañ / brgyad du ḥdod pa dañ / dgur ḥdod pa dañ drug yod de /*”と同種の記述が認められる。

77) 前註37) 参照。

する。願わくは、両書の全貌、更にはこれに連なるチベットの歴大な文献の宝庫が衆人によって掘り起されんことを。

(1976. 6. 29)

Ⅲ 原文転写

JGN (Na, 6b¹—7a¹) :

dbye ba (I) luñ gi rjes ḥbrañ *Sa sde* sogs gtso bor smra ba gcig dañ/
(II) *Kun btus* dañ tshad ma sde bdun gtso bor ḥdsin paḥi rigs paḥi rjes
ḥbrañ gñis yod la/ slob dpon Byañ bzañ gis/ “ḥdir rNal ḥbyor spyod pa
ni/ rnam pa gñis te/ rnam pa dañ bcas pa dañ (*orig.* gañ)/ rnam pa med
paḥo// de la rnam pa dañ bcas pa ni slob dpon Phyogs kyi glañ po la sogs
pa ste/ rnam pa med pa ni slob dpon Thogs med la sogs pa ste/ ”shes
gsuñs la/ Dse tā ris kyañ/ “sna tshogs gñis med pa Chos grags kyis bshed
pa”r bśad la/ *rNam ḥgrel* lHa Śākya gñis kas rnam bden du byas rGyan
mkhan pos gtso bor rnam rdsun dri med dañ/ Chos mchog gis gtso bor
rnam rdsun dri bcasu bśad/ rGyal tshab kyis/ “sde bdun gyi skabs sems
tsam paḥi rnam bshag byed tshe rnam rdsun lugs byed dgos gsuñs/” shes
gsuñs śiñ/ mKhas grub rjes/ “de (*orig.* da) ltar sna tshogs bśad kyañ rnam
bden rdsun gñis las rnam bden grub mthaḥ brliñ bas sde bdun ni rnam
bden pa byed dgos pa luñ du ma dañ/ rigs pas kyañ śes” gsuñs la/ de lta
na yañ luñ rigs kyi rjes ḥbrañs re reḥi gshuñ naḥaṅ rnam bden rdsun gñis
gñis kyi rnam bshag ḥoñ ba rje yab sras rgya bod kyi mkhas pa kun ḥdod
pas/ ḥdi gñis so sor khyab mñam byas nas sbyar bar nam yañ mi byaḥo//

de yañ rnam paḥi sgo nas rnam bden rdsun gñis/ (I) rnam bden la
(i) gzuñ ḥdsin grañs mñam dañ/ (ii) sgo ña phyed tshal/ (iii) sna tshogs
gñis med gsum (i) gzuñ ḥdsin grañs mñam pa la/ (a) rnam śes tshogs
brgyad ḥdod pa dañ/ (b) rnam śes tshogs drug ḥdod mkhan gñis/ (iii) sna
tshogs gñis med pa (a) rnam śes tshogs drug smra ba dañ/ (b) rnam
śes gcig bur smra ba gñis yod/ (II) rnam rdsun pa la (i) dri dcas (ii)
dri med gñis yod/

yañ rnam śes ḥdod tshul gyi sgo nas bshi ste/ (1) rnam śes tshogs
brgyad dañ/ (2) rnam śes tshogs drug dañ/ (3) rnam śes gcig smra ba
gsum yod la/ (4) rnam śes tshogs dgu ḥdod mkhan yañ grags śiñ yod
pas so//

CGN ① (Ka, 117b¹⁻³) :

dbye ba ni/ *Sa sde* sogs kyi rjes ḥbrañs luñ gtso bor smra ba luñ gi rjes
ḥbrañs dañ/ tshad maḥi bstan bcas sde bdun mdo dañ bcas pa nas bśad
pa ltar gyi rigs paḥi rjes ḥbrañs gñis su yod pa ni grags che la/ rnam

paḥi ḥdod tshul gyi sgo nas dbye na rnam bden rdsun gñis su yod ciñ de
yañ luñ rigs kyi rjes ḥbrañs re re laḥañ rnam bden rdsun gñis gñis kyi
rnam bshag yod par gshuñ du ma las bśad do// rnam bden rdsun gyi nañ
gses kyi dbye ba dañ ḥdod tshul ni ḥog tu ḥchad do//

CGN ② (144b³–145b⁵) :

rig paḥi rjes ḥbrañ gi sems tsam pas mñon sum la dbañ yid rañ rig rnal
ḥbyor mñon sum bshi ḥdod do// luñ gi rjes ḥbrañ gi sems tsam pas gshan
gsum ḥdod kyañ ran rig ḥdod mi ḥdod ni gsal bar ma bśad la/ rJe btsun
dam pa ḥJam dbyaṅs bshad paḥi rdo rjes “sa sdeḥi rjes ḥbrañ gi sems tsam
pas rañ rig mi ḥdod de/ *Sa sde lña* nas ma bśad paḥi phyir” shes gsuñs
so// de lta naḥañ luñ gi rjes ḥbrañ gi sems tsam pa la rañ rig mi ḥdod
pas khyab pa ni rJes btsun de ñid kyi shal gyis mi bshes te/ de ñid kyis
kun gshi dañ rañ rig gñis ka ḥdod paḥi sems tsam pa yod par bśad paḥi
phyir te/ *Grub mthaḥ chen mor* rnam bden paḥi thad du “kun gshiḥi ño bo
rañ rig gi myoñ bya tsam deḥi stobs las byuñ bas rtog pas de dag gzuñ
ḥdsin du sgro ḥdogs kyañ des sgro btags pa ltar gyi gñis ni rdsun yin la/
gñis ma yin pa ni rdsun ma yin paḥi phyir ro//” shes gsuñs paḥi phyir ro//

rTog ge ḥbar ba las/ “theg pa chen po pa ñid kyi slob dpon Thogs med
dByig gñen la sogs pa gshan dag ni” shes de gñis kyi ḥdod pa brjod paḥi
skabs su *Theg bsdus* las bśad paḥi mtshan ñid gsum gyi rnam bshag dañ
kun gshi dañ ñon yid ḥdod tshul sogs bśad nas deḥi mjug tu “sems de ñid
rnal ḥbyor pa de la rañ du snañ ba ḥdsin paḥi rnam pa dañ yud du snañ
ba gzuñ baḥi rnam par yoñs su gyur ciñ snañ ba ste/ phyi rol gyi don
med pas sems tsam du dmigs pa la brten nas yul mi dmigs par rab tu
skye la/ gzuñ ba med na ḥdsin pa dag kyañ med pas gzuñ ba mi dmigs pa
la brten nas ḥdsin paḥi rnam par śes pa rnam pa drug po dag mi dmigs
par rab tu skye ste/ ji srid kun gshiḥi rnam par śes pa rañ gi sems kyi
chos ñid rnam par rig pa shes bya ba ñid la mi gnas śiñ” shes kun gshi
dañ rañ rig gñis ka ḥdod paḥi lugs bśad ciñ/ de ñid ḥgog paḥi skabs su/
“yul du snañ ba ma gtogs par/ sems ñid ji ḥdra ba shig snañ/” shes sogs
rañ rig ḥgog paḥi rigs pa rnam gsuñs so//

dBu ma la ḥjug pa las kyañ/ “rnal ḥbyor pa yis bla maḥi man ñag
las/” shes pa nas/ “blo yañ med ces don ḥdi śes par gyis/” ces paḥi bar rnam
par rig pa tsam du bsgrub paḥi lugs *Theg bsdus* las ḥbyuñ ba rnam ji
lta ba bshin ḥgog par mdsad la/ deḥi mjug thog tu/ “gal te gzuñ med
ḥdsin pa ñid bral shiñ/” shes sogs gshan dbañ gi bsgrub byed rañ rig ḥgog
paḥi rigs pa gsuñs paḥi śa phyiḥi ḥbrel la dpag na yañ Thogs med sogs
kyi rjes su ḥbrañ baḥi rañ rig dañ kun gshi gñis ka ḥdod mkhan gyi sems
tsam pa shig yod par snañ ño// ḥon kyañ *ḥJug paḥi* rañ rig ḥgog paḥi

gsuñ de dag gis rig pañi rjes ḥbrañ gi sems tsam pa yañ mi ḥgog pa min
no//

CGN ③ (151a⁴–152a¹) :

spyir dños por smra bañi grub mthaḥ smra ba rnam la 1) rnam śes tshogs
gcig tu ḥdod pa dañ 2) gñis su ḥdod pa dañ 3) drug tu ḥdod pa dañ 4) bdun
du ḥdod pa dañ 5) brgyad du ḥdod pa dañ 6) dgur ḥdod pa drug yod par
bśad do//

1) dañ po la kun gshi rnam śes kho nar ḥdod pa dañ yid kyi rnam śes
kho nar ḥdod pa gñis yod par bśad la rtsa bañi grub mthaḥ ni “byañ sems
gcig pur smra ba” shes bya bas ḥdod pas sbyar bar bśad de/ de yañ rnam
śes gcig ñid rten dbañ po so so la brten nas yul so so la rgyu bas rnam
śes so soñi miñ thob pa yin te/ dper na khañ pa bug pa mañ po yod pa
ru mar me gcig btegs pa bshin no// śes pa deñi cha gcig ni don du snañ shiñ
rigs mod kyañ shen ciñ rtog pa med do// cha gcig ni don du snañ ba la
shen ciñ rtog pas na śes pa la rtog med kho nar ḥgyur bañi skyon med
shes zer shiñ rnam par śes pa drug ni yid kyi skye mched do shes ḥpai
luñ ḥdren par byed do//

2) gñis su ḥdod pa ni ñon yid dañ ḥjug śes gñis la ḥdod par Kha che
La kśmis bśad do//

4) bdun du ḥdod pa ni tshogs drug dañ len pañi rnam śes la ḥdod do
shes kyañ ñes bśad do//

6) dgur ḥdod pa ni slob dpon Yañ dag bden pas ḥdod par bśad de/
tshogs drug dañ len pañi rnam par śes pa dañ kun gshi dañ dri ma med
pañi rnam śes te dgu/

3) tshogs drug tu ḥdod pa ni sde bdun gyi rjes ḥbrañ gi sems tsam pa
dañ/

5) brgyad du ḥdod pa ni sa sde sogs las ḥbyuñ ba ltar gyi luñ gi rjes
ḥbrañ gi sems tsam paḥo//

de lta naḥañ gshan rnam kyi gshuñ rgyas pa bod du ma ḥgyur ba dañ
grags chuñ bas ḥdir mi spro

CGN ④ (155a⁵–b⁵) :

slob dpon Byañ chub bzañ pos “Thogs med yab sras rnam rdsun pa dañ
Phyogs glañ yab sras rnam bden pa”r bśad mod/ ḥon kyañ sde bdun mdo
dañ bcas pañi dgoñs pa ni rnam bden pa yin par ma ñes te/ lHa bdañ blo
dañ Śākya blos *rNam ḥgrel* gyi dgoñs pa rnam bden du bkral shin/ Śes
rab ḥbyuñ gnas sbas pas rnam rdsun dri med/ slob dpon Chos mchog gis
rnam rdsun dri bcas su bkral bañi phyir ro// Thogs med yab sras kyi
dgoñs pa yañ rnam rdsun du ma ñes te/ *rTog ge ḥbar bar* de dag gi
bshed pa ḥgog skabs rnam bden pañi ḥdod pa bśad pañi phyir ro// des na

“luñ rigs rjes ḥbrañ gñis ka re reḥi gshuñ naḥaṅ rnam bden rdsun gñis gñis
kyi rnam bshag ḥoñ ba rJe yab sras sogs rgya bod kyi mkhas pa kun ḥdod
pas ḥdi gñis so sor khyab mñam byas nas sbyar bar nam yañ mi byaḥo//
”shes rJe btsun dam pa ḥJam dbyaṅs bshad paḥi rdo rjes gsuṅs pa śin tu
legs pas kho bo cag kyañ de kho na ltar ḥdod do//

CGN ⑤ (157a⁵–b⁵) :

bden rdsun gyi khyad par ni

I) sems tsam rnam bden pas dbaṅ poḥi mñon sum la gzuñ ḥdsin rgyaṅ
chad du snañ ba dañ/ sño sogs phyi rol don du snañ ba dañ/ miñ dañ tha
sñad kyi gshir rañ mtshan gyis snañ baḥi cha la ma rig paḥi bslad pa
shugs kyañ sño sogs de lta buḥi rags par snañ baḥi cha la ma rig paḥi
bslad pa cuñ zad kyañ ma shugs par ḥbod do//

II) rnam rdsun pa rnam ni so so skye boḥi rgyud la rañ rig mñon
sum ma gtogs ma rig pas ma bslad paḥi mñon sum gyi śes pa med pas
sño sogs de lta buḥi rags par snañ baḥi cha la yañ ḥkhrul baḥi bslad pa
shugs par bshed do//

des na rnam bden pas de lta buḥi rags paḥi rnam par snañ ba yañ śes
pa ñid kyi rdsas yin pas ma ḥkhrul bar ḥdod la/ rnam rdsun pas rags pa
gsal bar snañ ba śes paḥi rdsas yin kyañ de lta buḥi rags par snañ baḥi cha
ni ma rig pas bslad paḥi dbaṅ gis snañ baḥi ḥkhrul ba ḥbaḥ shig tu ḥdod
do// de la dgoṅs nas rnam bden pa la rnam pa dños por ḥdod pa dañ
rnam rdsun pa la rnam pa dños por med par ḥdod pa shes paḥi tha sñad
rgya bod kyi mkhas pa rnam kyi bśad do//

CGN ⑥ (158b²–160a³) :

dbye ba ni/

I) rnam bden pa la (i) sgo ña phyed tshal ba dañ/ (ii) gzuñ ḥdsin
graṅs mñam pa dañ/ (iii) sna tshogs gñis med pa ste gsum du yod la/
de dag gi ḥdod tshul ni phyi don mi ḥdod pa ma gtogs mDo sde paḥi
skabs dañ ḥdraḥo//

(II) rnam rdsun pa la (i) dri bcas (ii) dri med gñis so// ḥdi gñis kyi
khyad par ni

(1) kun rdsob kyi snañ ba mthaḥ dag ma rig paḥi bag chags kyi dbaṅ
gis snañ ba yin pas/ de log na ldog paḥi phyir saṅs rgyas la rdsun snañ
med par ḥdod pa dri med pa dañ/ kun rdsob kyi snañ ba ni ma rig pa
dañ ḥbrel ba gañ yañ med pas de log kyañ mi ldog paḥi phyir saṅs rgyas
la yañ rdsun snañ yod par ḥdod pa dri bcas pa yin no shes paḥi bśad tshul
gcig dañ/

(2) yañ rnam mkhyen la thams cad snañ mi snañ la khyad par med
kyañ tshul de mañ du bsgrub mi bsgrub kyi dri bcas dri med du bshag

pa ste/ dper na ñan rañ rigs ñes kyis chos kyī bdag med ma rtogs par
mthun kyañ de ltar bśad pa mañ mi mañ gis chos kyī bdag med rtogs pa
yod pa dañ med par ḥdod paḥi rañ rgyud pa gñis su grags pa bshin no/
shes paḥi bśad tshul gcig dañ/

(3) yañ sems kyī ño bo la gñis snañ gi dri mas bslad par ḥdod pa dri
bcas dañ/ dri ma blo bur ba yin pas sems kyī ño bo la cuñ zad kyañ ma
bslad par ḥdod pa dri med pa yin no shes paḥi bśad tshul gsum byuñ baḥi
sña ma gñis grags che shiñ lugs gsum kas *Sa sde* dañ tshad ma sde bdun
Dse ta ri sogs kyī luñ mañ du ḥdren no// mKhas grub thams cad mkhyen
pas *sDe bdun Yid kyī mun sel* du lugs sña ma phyogs tsam bśad do//
rnam rdsun pa gñis kyī khyad par ḥdi dag rJe yab sras kyis rgyas par
gtan la phab pa mi snañ shiñ/ khyad par du sems kyī ño bo la gñis
snañ gi dri mas bslad par ḥdod pa yañ rnam rdsun dri bcas kyī lugs su
ḥthad dkaḥ bar ḥdug go// sañs rgyas la gñis snañ yod paḥi don *rGyud
gshan bsgrub paḥi ḥgrel par* Dul ba lhas/ “ye śes de ni gzuñ ḥdsin dañ
bcas kyañ de ñid kyis log pa ñid du gzigs paḥi phyir/ ”shes pa lta buḥi
don du bsams nas gzuñ ḥdsin gyi gñis snañ yod pa dañ med pa la byed
par ḥdod pa ni/ spyir sañs rgyas kyī sa na yul can gyi snañ ba gtan med
par smra na mi ḥthad pa rtogs sla shiñ/ gzuñ ḥdsin rgyañ chad du snañ
rgyas kyī sa na yod par smra na lugs ḥdi la śin tu ḥgal lo// des na lugs
par ba la yañ cuñ zad bśad du yod mod kyañ mthaḥ chod pa shig dkaḥ
bar snañ ño// ḥdi dag las brtsams te briod par bya ba mchog tu mañ
mod kyī re shig bshag go//

rnam bden rdsun gñis las rnam rdsun grub mthaḥ brliñ bar rGyal tshab
thams cad mkhyen pa bshed ciñ mKhas grub thams cad mkhyen pas
rnam bden sna tshogs gñis med grub mthaḥ brliñ bar bśad do// de gñis
kas kyañ rañ gi bśad tshul de rJe bdag ñid chen poḥi dgoñs pa yin par
gsuñs ḥdug pas/ spyir rmad du byuñ baḥi sems dpaḥ chen po de dag gi
dgoñs pa ji ltar yin pa bdag lta bus ji ltar śes nus/ ḥon kyañ sde bdun gyi
skor la rGyal tshab thams cad mkhyen pas pañ chen Chos mchog gi ḥgrel
pa gtso bor mdsad pa dañ/ mKhas grub smra baḥi ñi mas lHa dbañ
bloḥi ḥgrel pa gtso bor mdsad par ḥdug pas rJe bdag ñid chen pos *rNam
ḥgrel* gyi bśad pa gnañ baḥi tshe ḥgrel pa so soḥi lugs la brten paḥi ḥchad
tshul shig gi khyad par byuñ ba yin nam sñam mo//